

兵庫・溝之口遺跡

みぞのくち

り、通常の集落とは異なる遺跡と考えられる。

木簡は大溝より出土した。大溝は、上幅約6m深さ約〇・六mで、埋土からは七・八世紀の土師器・須恵器が大量に出土した。木製品としては他に、横槌・木錘・板片・杭などが出土した。

8 木簡の釁文・内容

(1)

「く子日

(84)×34×3 039

- 所在地 兵庫県加古川市加古川町美乃利
1
調査期間 一九九八年(平10)七月~一一月
2
発掘機関 加古川市教育委員会
3
調査担当者 西川英樹
4
遺跡の種類 集落跡
5
遺跡の年代 弥生時代~平安時代
6
遺跡及び木簡出土遺構の概要

溝之口遺跡は、加古川東岸の沖積低地の微高地上に所在する弥生時代から平安時代の集落跡で、中心は、弥生時代中期(III・IV期)と、古墳時代後期から奈良時代である。

奈良時代の遺構として

「口」の字状に配置された掘立建柱建物を検出した。出土遺物も井戸より出土した「大穀」「長」「田村南」と判読できる墨書き土器の他、硯・瓦片・綠釉陶器片などがあ

現状はかなりの部分が欠損している。上部に切り込みを入れている。付札と考えられる墨書きは片面のみである。「子日」以下の文字の有無は折損のため不明であるが、十二支を用いて日付を記したものと思われる。県内の類例としては、春日町の山垣遺跡において、十二支で日付を記した木簡が出土している。

今後、調査と整理が進めば、出土数がさらに増えることが予想される。

(西川英樹)

